

波乱一杯の会長職を務めて

平野雅章

(2004年～2006年会長)

山田善靖会長の後を請け、2004～06年度の会長を務めました。

会長就任して間もなく、当学会も事務委託をしていた(財)日本学会事務センターが、放漫経営から倒産するという前代未聞の事件が起こり、多くの学会が大変な経済的・实际的被害を被りました(総被害6億円)。当学会は、理事各位の献身的かつ迅速な働きにより、比較的軽微な損害に抑えることができました。同年秋には、京都の某コンピュータ学校が、AIS規定の抜け穴を利用してAISの日本支部を設立してしまうという珍事が起きました。AIS傘下の大会に参加実績のない、しかも単一組織のメンバーを主とする申請に、AIS理事会がめくら判を押してしまったという点で、理事会でも問題となり、支部規定が大幅に改訂されました。本学会は、正統的な日本支部(JPAIS)設立を支援するとともに、本学会自身もAISのAffiliated Organizationとなりました。

会長職の1年目から2年目の前半までは、この2件の火消しに追われましたが、これらの経験から、理事会組織の簡素化と理事数の減少、理事会運営の効率化を図り、それまでほぼ毎月2時間以上かけていた理事会を、現行のように年6～7回、2時間以内という慣行を作りました。また、2005年度に、長年懸案であった学会デジタル化の第一段階が完成して(それまでは、経営情報学会がアナログ運用という「紺屋の白袴」だったわけです!)、飯島淳一会長に引き継ぎました。編集委員会からの宿題は、学会に期待することなども述べることにしていますが、現在の当事者でもあることから、学会として目指している方向について述べます。

1. 国際化

現在、理系分野は言うに及ばず、経済・経営分野と比較しても、経営情報分野は国際化が圧倒的に遅

れています。具体的な症状は、ICIS等の当分野における代表的な国際会議への日本からの発表や出席が異常に少ないことに表れています。毎回1,000人以上が出席するICISに、このところ日本からの出席は毎年一桁です。中国・韓国・台湾・香港・シンガポール等のアジア諸国からは大挙して参加しています。

原因は、鶏と卵ですが、国際会議に行かないから、研究のテーマや方法論がガラパゴス化してしまう。だから、投稿しても通らない。だから、行かないという悪循環。他分野では、日本からも国際進出していることをみれば、言語が理由でないことは明らかです。本学会では、現状打開の一助として、AIS関連のICISおよび地区大会に採用され発表した場合には報奨する制度を新設しました(詳しくは、学会サイトをご参照ください)。本年7月のPACIS(ホーチミン市)では、日本から2件の発表があり、秋季大会(金沢)で、表彰する予定です。また、2017年のICIS招致を目指して活動を開始しています。是非、会員の皆さんも、まず、ICIS(今年の12月は、米国オーランド)やPACIS(来年6月は、韓国済州島)に参加して、次には投稿して、発表することにより、国際水準の研究を目指してください。

2. 研究水準の高度化

上記とも関連しますが、学生・院生段階からの水準高度化を図るための施策を開始しています。本年度から、学生による発表はポスターセッションとなりました。進行中の研究発表を切磋琢磨するような環境が整ったら、改めてドクトラルコンソーシアムの再開を試みたいと考えています。経営情報分野においては、このような研究および研究者育成のためのインフラストラクチャーの点でも、日本は孤立していることにより、研究者はいろいろの不利を被っています。また、上記の報奨制度は、AIS関連の論

文誌および電子雑誌も対象としています（詳しくは、学会サイトをご参照ください）ので、是非投稿してみてください。

3. 社会との連携の深化

経営情報学のような分野は、社会の現実や要請から乖離して存在することはありえません。ところが、過日開催された創立20周年記念公開シンポジウム時のアンケートでは、本学会の知名度がガッカリするほど、とても低いことが明らかになりました。

本学会では、ITと社会との関係を見直す時事的なテーマ（昨年は「災害と情報支援」、今年は「人とITとの共創」）を打ち出すとともに、関連団体と協力してこれらのテーマを発展させるような手を打つ一方、実務家の団体であるITコーディネーター協会との連携なども試んでいます。今後一層「社会における経営情報学会」を意識した活動を強化していく所存です。会員の皆さんと一緒に、社会を視野に入れた実践・研究・教育に邁進していきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。